

創業期の集配用かばん



郵便創業期には新しい技術や用具類が導入されましたが、集配用かばんもそのひとつでした。このかばんは収集や配達の際に郵便物の遺失や濡損を防ぐための必需品で、現在でもその基本的な機能は変わっていません。

写真のかばんは明治4年の郵便創業時のもので、書状通箱と呼ばれていました。当時かばんは大変珍しく、肩から集配用かばんをかけた法被姿の集配員は町中の注目を集めたようです。

(表紙解説)

東海道五拾三次之内 由井 薩埵嶺

由井正雪の生家がある宿を過ぎ興津へ向かう途中に薩埵峠の難所がある。この図は、興津側から薩埵峠越しに田子の浦を隔て富士の遠景を描いたもので、旅人がへっぴり腰に崖から望むその風景の美しさは今も変わらない。

薩埵峠を越える道は当初海沿いの古道で、波打際は「親しらず子しらず」と呼ばれるほど危険であったが、明暦元年(1655)の朝鮮使節来朝を機に山中を通る新道が開かれた。

(資料紹介・表紙解説 附属資料館 井上卓朗)